

陸文夫『小巷人物志』

—「小販世家」を中心に—

小堀 恵美子

陸文夫の描く世界はほとんどの場合、「小巷」という言葉で表わされる蘇州の路地裏を舞台としている。たとえば「臨街的窓」¹（『小説家』1985年1期）は、「街（大通り）」という語が使われるにもかかわらず、次のような書き出しである。

三山街といっても山はない。それに大通りと呼べるほどでもない。今で言うと比較的広い路地（小巷）というのがせいぜいのところだが、清朝の時は四方に通じた大道で、八人がかつぐ大きな駕籠が通ることもできたのだ。

陸文夫のいう「小巷」のイメージは『小巷人物志』の前言「夢中の天地」に述べられているとっていいだろう。そこには私達が蘇州という地名から思い浮べる河辺の灰色の壁の家々や、狭い石だたみのある街が愛着をこめて、きめ細かに描写されている。そしてこのような「小巷」の人々を描くことに、陸文夫はこだわっている。世の中の先端にならないような平凡な考えを持ち、矛盾を自己内部で鋭く意識することもなく、何かのきっかけで「成長」することもない。そうした世の流れのままに動く人物たちを、街の片隅「小巷」に限定して描くところに陸文夫作品の新鮮さがある。

「小販世家」（『雨花』1980年1期）の朱源達は、代々いろいろな小商いをしてきた「家柄」で、彼と彼の父親の代はワントンを売っている。解放前、職がなく国語教師の手伝いで学生の作文を見ていた「私」は、朱源達の屋台の常連だった。朱源達のワントンは、刺すような寒さの中で、「私」の心の中まで暖めてくれる存在だった。「私」は芝居がひける頃聞こえてくる「吃、吃、快点儿吃；快点儿快点儿，吃吃吃！」と呼びかけるような拍子木の音を每晚待った。

解放後、教育部で幹部になった「私」と、相愛らず小商いを続ける朱源達の道は次第に食い違いはじめる。自然発生的資本主義とみなされる商いを続け、投機的といわれても懲りない朱源達は、「私」にとってうっとろしい存在であり、論すべき対象になる。朱源達も彼なりの問題を抱えている。どうして工場で働かないのかと問う「私」に、朱源達はこう答える。「高さん、俺には四人子供がいる。それに両親とで一家八人、三、四十円で腫を養えるんだ？俺が生まれつきのろくでなしで、恥知らずで、金にしか興味がないとでもいうのかね！……」私はこの言葉に、高い建物の上からまだ暗いじめじめした地面があるのを見つけたような衝撃をうける。

そして「階級闘争」の時代が来る。「私」も批判されるが、朱源達のところは略奪というべき悲惨さだった。鉄の棒や太刀を持ったごろつき風の男たちが片っぱしから家の中のを壊すこの場面は、知識人の家での「抄家」との違いを示して興味深い。その結果、何の罪もないワントンのかつぎ荷も壊され、朱源達一家は「街でむだ飯を食わない」ように下放させられる。

八年後、文革が終わり戻ってきた朱源達は意気揚々として「私」に報告する。ふたりの息子とふたりの娘は「鉄飯碗」だし、五番目の子は大学に入れて「金飯碗」にする、失敗はもう繰り返さないと。



理想ではなく具体的な食物によって生活を支えていかねばならず、また支えるのが精一杯という人物が、自分の力ひとつで文革の荒波を乗り切らねばならなかった時、彼は小商いへの愛着を捨て、安心を得る。残されるのは慢性化した将来への危機である。彼はこの危機から逃れるために、少しずつ利口になり「鉄飯碗」の道を選ぶ。一方、朱源達が下放する時、拍子木を預かった「私」は、それを大切に保存し、朱源達の商売の暖かさ、大切さがようやくわかった、彼と同じ位置に立てたと感じている。しかし、再会した時朱源達はもうそこにはいなかった。「私」のセンチメンタルな共鳴、生半可な理解を拒否するところに行ってしまった。

しかし考えてみれば、「私」が同じ位置に立てたと思ったところにはたして朱源達が以前にも居たことがあったのであろうか。「私」はいつも思

想によって物事をはかってきた。朱源達は暮らしの糧という物指しで物事をはかってきた。朱源達のワンタン売りに対する愛着は、馴れ親しんだ客商売と安定した暮らしを基本としており、「私」の考えるような人に暖かみを与える職業としての誇りという明確な意識に根ざしたものではなかったろう。朱源達の物指しは「唐巧娼翻身」（『上海文学』1981年2期）という作品に登場する紡績の労働模範で文盲の女性唐巧娼と共通している。彼女は字を覚えなかった理由をこう述べる。「知識分子があんな目に遭うのを見て、ぞっとしない人がいる?!」そして、試行錯誤の末、朱源達は「鉄飯碗」にたどりつくのである。

雷達「『探求者』的新足印」（『上海文学』1981年2期）は、「小販世家」についてこういう。

もともとこの小販に属していた労働方式と労働に対する渴望は、ついに彼〔朱源達——筆者〕を離れ、彼はこれから「標準的な生活様式」の中で皆と同じ高さの「画一化された」人になりたいとだけ考える。作者は最後に感嘆する。「結局皆『鉄飯碗』を捧げ持ち、頭も使わず、力も使わないようにと考える。その鉄飯碗も期限が来ても一杯にはなるまい、なべの中の飯はいつも足りないのだ！」これは陸文夫が朱源達の魂を探求した後、私たちに提起したまともや深く考えさせられる問題かもしれない。

朱源達が小商売への愛着を捨て、鉄飯碗へと進んでいってしまったのはなぜか、そしてそれは楽観できることなのか。雷達は「小販世家」がそれらの問題を提起したのだとする。たしかに作品を読んだ時、朱源達が小商売を捨てざるをえない方向に追いこんだ社会への疑問を感じずにはいられない。その疑問は、「特別法庭」（『人民文学』1979年6期）や「門鈴」（『人民文学』1984年10期）、「臨街的窓」といった作品に対しても浮んでくるものである。「臨街的窓」は、久し振りに時代劇の大作に意欲をみせた老劇作家の作品を、やり手の幹部が現代劇に変え、討論会を開いて他にもいろいろ手を加えて賞を取るまでもっていく様子を描いている。老劇作家の情熱はなぜそがれてしまったのか。しかも情熱をそいだ原因である、賞を取るための改作は、幹部の手腕の確かさを証明し、それによってすべてうまく進むことになるのである。だが、そこで印象に残るのは、人々の情熱を吸いとっていく社会に対する疑問よりもむしろ、幹部の「指導」

によってすべての人が一応の満足を得たこと、老劇作家が賞金をうけとり、怒りもせずに情熱をかきたてられる以前の淡々とした生活に戻っていったという点である。

「小販世家」における魅力も、朱源達を追いこむ原因はどこにあるのかといった問題を越えて、朱源達がしたたかに生きていってしまうところにあるのではなかろうか。朱源達は彼なりの物指しを全く変えることなしに、「私」の手をすり抜けていってしまう。そして、朱源達の変身に戸惑い、今までの経過を悔みながらも、先にあげた「鉄飯碗も期限がきても一杯にはなるまい」の言葉のように朱源達たちの将来にまたぞろ不安を感じ出す「私」と、それは対照的である。この最後の言葉を作者の言葉としてとらえる評論が多いようだが²、作者と「私」は他の部分でも必ずしも重ならない。この言葉が実際に、中国社会の前途にある影をうつしているとしても、すぐさま作者自身の執筆の目的と結びつけることはできないだろう。朱源達の持ったくましさ、そして彼と「私」のすれ違う心理が、この作品を成功させたといえる。そして作者の意図もそこにあったのではないかとも思えるのである。

陸文夫作品の持つ特長として、その人物設定の新鮮さがあげられることを前に述べた。「小販世家」ではその人物設定の効果がよく発揮された。しかし、いくつかの作品を見る限り、それらの人物を通して街の片隅で生きる人々の視点（例えば唐巧娣の言葉にみられるような）をもって描ける可能性を持ちながら、成功したと思われる作品はあまりない。たとえば「往後の日」(『雨花』1980年8期)、「一路平安」(『人民文学』1981年6期)の冗漫さは失敗作とっていいだろうし、「門鈴」も徐経海の卑屈さが目立ちすぎて矮小な感じを与える。

「小巷」という地域に限って描かれる人々、その人物を通じた独特の視点に立つことによって、人々の喜怒哀楽を映し出す独特の世界が生み出されることを、陸文夫に望みたいのだが。

(注1) 『小説家』1985年1期、2期に「同題小説」として、陸文夫、李国文、从維熙、邓友梅、張賢亮、何士光が、「臨街的窓」という題の短篇を載せている。提案したのは陸文夫だったらしく、邓友梅の「臨街的窓」の書き出しには次のような一節がある。

「陸文夫が題を出し、皆が文章を書く、この方法はいいが、この題には私は賛成しない。陸さんが早くに原稿を書きあげて引出にしまっていたからかもしれない。それは『臨街的窓』という題だった。彼は準備も自信もあって皆が準備も自信もないのに対してなのであって、もちろん十分余裕があったのだ。」（『小説月報』1985年4月による）

（注2）雷達その他、范伯群「陸文夫論」（『文学評論叢刊』第十輯）でも同様である。（E.Koshio）

バックナンバー目次	
創刊号	
• 創刊にあたって	釜屋 修
• 当代農村文学読書札記 ——阿Qの影を念頭に——	青谷 政明
• 孔捷生と天安門事件	杉山 菜子
• 柳青とリンゴ ——柳青再評価をめぐって——	加藤 三由紀
• 《編輯雑感》	釜屋 修
第2号	
• 崩れ行く風景の向う側 ——高曉声「水東流」・邓剛「陣痛」——	釜屋 修
• 李准『その道を歩んではならない』 の評価をめぐって	加藤 三由紀
• 張潔と駱賓基	小堀 恵美子
• 張一弓「犠牲」と李小孟（当代農村文学読書札記の二）	青谷 政明
• 当代文学研究会例会活動（1983.5～1984.11）	
• 《編輯雑感》	加藤 三由紀